

# 現代日本における散骨 ―受容の状況から―

谷山昌子(東京工業大学)

## 1. 目的と問題意識

本発表では、新たな葬送のなかから「散骨」を取りあげ、現在の日本においてどのように受容されているのかを明らかにすることを目的とします。

日本で「伝統的」とみなされてきた墓に代わる永代供養合葬墓や散骨、樹木葬、納骨堂など新たな葬法、親戚や知人の弔問を受けずに弔う「家族葬」、無宗教式の葬儀や火葬のみを行う「直葬」などが一般的になりつつあります。そして、同じ頃から全国で引取り手のない遺骨や埋葬されない遺体が急増している事態も看過することはできない深刻な課題です<sup>1</sup>。

近年では、死後の終の棲家を自ら選択し準備する人びとが現れ、多様な葬送と墓のあり方が一般に受け入れられています。総理府が1990年に実施した調査では、散骨を「認めるべきではない」とする意見が56.7%で「認めてもよい」の21.9%を大きく上回っていましたが、2011年度に行われた調査では、散骨を「認める」という意見が84%を超える結果でした。利用についても、「散骨を希望」は12.8%から35.8%と大幅に増加し、人びとの意識の変容がみられます。

今ではさまざまな担い手によって散骨が行われるようになりました。日本で散骨を行う業者は200社以上ともいわれ、複数の業種から新規ビジネスとして取り組む動きが活発です。本来、「弔い」の行為であるはずのものが、あたかも遺骨を処分するかのように扱う業者が現れ、本来の意図を逸脱している点に懸念する声があがりはじめています。

## 2. 対象と方法

調査方法は、各NPO法人のスタッフと会員(10名)、仏教寺院住職と契約者(7名)、企業スタッフ(2名)、個人散骨体験者(2名)への聞き取り調査を実施しました。企業利用者については、企業のホームページに掲載されている「遺族者様インタビュー」(11件)を用いました。

対象者には、本調査の目的と研究成果の公表について事前に説明し、ご理解とご協力の了承を得ています。

## 3. 結果

聞き取り調査では、誰が散骨を決定(希望)したのか、経緯や動機、そして誰によって散骨が実施されたのかに関連する発言に注目して分析を行いました。経緯や動機については、複数の要因が挙げられました。

### 3-1. NPO法人葬送の自由をすすめる会(以下、「すすめる会」)

---

<sup>1</sup> 葬送に多様化が認められるようになったと同時期である1990年頃から、日本では孤独死<sup>1</sup>が増加し続け、2019年時点の東京23区では毎日15人以上が孤独死していると推計される(谷山昌子2022)。

この団体は、1991年に日本で初めて「自然葬（海への散骨）」を実施したことで知られています。当時の日本では、従来の葬送慣習に対する改革を求める運動が盛んでした。この魁となったのが「すすめる会」といわれています。

本人決定が9例中8件で、そのうち8件が「自然に還りたい」を動機としています。次いで6名が「石の墓（暗い地面の下）に入りたくない」など従来の葬送に対する否定的な理由をあげました。墓じまい<sup>2</sup>など「墓の継承・維持困難」は1件でした。散骨は全て家族によって行われました。

「すすめる会」は、自然環境保護思想や死後の自己決定という理念に賛同した会員により構成されています。会員は自らの死や死後について考え、それが実行されるように生前から家族の理解を得よう努めるなど準備をしている様子が確認されました。

#### 4-2. 千葉県の日蓮宗正栄山 妙海寺<sup>3</sup>

近世以降続いてきた寺檀制度、従来通りの墓制度と現在の日本の社会のあり方とのミスマッチを解消するために、持続可能な新たな供養とお墓のカタチを提案する1つとして、2021年5月より海洋散骨をはじめています。宗教宗派不問、ペットも利用可能、仏教式の葬送、遺骨を全て海に還すのではなく一部は妙海寺境内にある集合墓で永代供養されるという点に特徴があります。

本人意思による生前契約者6名中5名がリタイア後に東京都や神奈川県から勝浦市に移住してきた人たちでした。「海（自然）に還りたい」という考えが5名に一致していました。人生の最晩年を風光明媚なこの地で過ごし、世界につながる美しい外房の海に眠りたいという思いを抱いていました。散骨を実施した1名は、「墓の維持・継承困難」を理由に父の散骨をした「娘」です。他の契約者5名はご存命のため、散骨の実施者についてはお尋ねしていません。

#### 4-3. 株式会社ハウスボートクラブ<sup>4</sup>

代表である村田自身が母の意思を尊重して海に散骨した体験から、2007年に会社を立ち上げました。「自分らしい」最期を伝えることの大切さを、自由でクリエイティブな葬送を提供することで伝えたいとしています。

結果は11例のうち8名が生前の本人の希望を尊重していました。動機で最も多かったのは「海（自然）に還りたい（7名）」でした。その他、「ペットと一緒に散骨してほしい」と「墓の維持・継承困難」が1名ずつでした。

散骨はすべて家族・親族によって行われ、友人・知人を招いた事例もありました。船をチャーターして各々の趣味や意向をいかし、ロック音楽を流したり、おしゃれをしてデザートブッフェを楽しんだり、ピンクやオレンジの華やかな花を揃えた祝い事のパーティのような事例もありました。6例が「故人が喜んでいると思う」と語り、「自分が考えたように」「心おきなく見送りたい」という依頼者の気持ちに企業が応えるオーダーメイドのような散骨といえるでしょう。

#### 4-4. NPO 法人やすらか庵<sup>5</sup>

<sup>2</sup> 「墓じまい」は、管理できなくなった墓を撤去し、遺骨を新しい墓や納骨堂などに移す改葬をさす。

<sup>3</sup> 所在地：千葉県勝浦市

<sup>4</sup> 所在地：東京都江東区

<sup>5</sup> 所在地：千葉県

代表は真言宗の僧侶が務めています。従来通りの葬送が立ち行かなくなった現状から、故人の供養や墓の獲得・維持・継承困難を抱える人たちを救済するために NP0 を発足し、2001 年から散骨をはじめています。

本人意思により決定されたのは 8 例中 3 件でした。理由は「夫の墓に入りたくない」、「契約直後に自死」、「墓の継承・維持困難」が 1 名ずつで、家族（夫・娘）による決定は「墓じまい（2 名）」でした。家族・親族以外による決定が 2 件で、いずれもアパートの家主でした。部屋の借り手が遺骨を置き去りにしていったものの依頼を受けた例でした。高齢で入院中の依頼者を含む 8 件の全てが委託により「やすらか庵」スタッフによって散骨されました。

#### 4-5. 個人散骨経験者 A さん（男性・60 歳代）、B さん（男性・30 歳代）<sup>6</sup>の場合

どちらも海外において、A さんご自身の母を、B さんは祖母の散骨を行った経験があります。故人の希望を尊重して決定したのは B さんです。A さんは、お墓で納骨の際に「故人が喜ぶに違いない」と思いつき、急遽、散骨を決定し、一握りのお骨を持ち帰り、その後、散骨したということです（息子）。いずれも家族・親族によって散骨されました。

### 5. 考察

本調査で触れた 35 事例のうち、本人による決定は 25 件でした。本人（故人）動機・経緯が多かった順に、「自然（海）に還りたい（12 名）」、「石の墓（暗い地面の下）に入りたくない（11 名）」で、海に葬られることに「世界とつながれる喜び」と感じたり、「海全体が自分の墓だと皆に自慢したい」など、「自らの納得いく最期を決定したい」という積極的な意思が読み取れました。一方、墓じまいなど「墓の維持・継承困難」をあげた 2 名は、「子どもがなく、お墓をどうしようか悩んでいた」という問題解決策として至った結論として散骨を選択していました。

家族によって決定されていた事例は、「故人が喜ぶ選択だと思った（8 名）」という、生前の本人意思を尊重したい、本人の最後の自己決定を後押しするものや、「従来の葬送に魅力を感じられないため、自分たちの納得いく見送りをしたい」という自主性を重視したものといえます。「墓の維持・継承困難（2 名）」、「故人と関りたくない（1 名）」という動機からは、生前より疎遠であった故人と一切の「関係を断ちたい」という感情が読みとれます。

誰が実際に散骨を実施したかについて、30 件中で家族・親族によるものが 23 件でした。第三者（委託）によるものは 8 件で、この中には、誰がどのように死者を葬るか、という選択が第三者によって決定されたものがありました。これらの結果から、散骨が必ずしも「死後の自己決定」という積極的な理由から選択されているわけではないということ、また、家族・親族だけでなく、第三者の手によって決定・実行されている現状がみえてきました。

「すすめる会」が発足された 1991 年当初、葬られる本人の思想や理念に基づく積極的な意思表示により実現されていた散骨が、今では先祖代々の墓を手放すため、あるいは何らかの事情により墓がもてない、または弔い手不在などの困難を抱える人たちの選択肢になっていることがわかりました。

---

<sup>6</sup> 2 名とも東京都在住

## 7. まとめにかえて

日本では明治以降、葬送や墓の維持管理は、後継ぎを前提とした家族に委ねられてきましたが、現在の日本では、葬送の担い手は家族・親族や地域の手から葬儀業者に移り、家族代々の墓を維持するという前提は崩れつつあります。

人びとの葬送に対する意味づけや文脈に大きな変容が現れているにも関わらず、これまでの研究では死者の尊厳性の確保についての議論は充分とは言えず、今日の葬送の諸相に抱く人びとの真意については、あまり問題にされてきませんでした。社会的な合意形成もなされておらず、新たな秩序を構築するための模索が続けられています。新たな葬法に関して法律による定義はなく、散骨に関するガイドラインが厚生労働省から 2020 年に発表されたに留まっています。1948 年の墓地埋葬等に関する法律<sup>7</sup>制定当時には想定しえなかった多くの課題への対応が求められています。

納得のいく満足な仕方です死者とのお別れができなかった場合、遺族はその後の生産性低下や心身不調などを訴える可能性が高いという報告もあり、現代日本人の宗教的感情に即した公共福祉という視点から葬送の意義を問うと共に、生者と死者との関係性を見つめ直すことが今後の課題です。

## 参考文献

井上治代, 2003, 『墓と家族の変容』 岩波書店.

金セツピョル, 2019, 『現代日本における自然葬の民族誌』 刀水書房.

谷山昌子, 2022, 「行政が守る死後の尊厳」, 日本葬送文化学会『葬送文化』(23), 8-19.

問芝志保, 2020. 『先祖祭祀と墓制の近代一創られた国民的習俗』, 春風社.

ブルーオーシャンセレモニー「お客様の声 遺族様インタビュー」

(<https://blueoceanceremony.jp/interview/>) (2022. 7. 12 取得)

槇村久子, 2013, 『お墓の社会学ー社会が変わるとお墓も変わる』 晃洋書房.

村上興匡, 2007, 「葬儀の変遷と先祖供養」『シリーズ宗教で解く「現代」 vol. 3 葬送のかたち 死者供養のあり方と先祖を考

える』 佼成出版社.

森謙二, 2013, 「お墓についての意識調査」

(<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/50630.pdf>) (2022. 6. 12

取得)

——, 2014, 「死の自己決定と社会ー新しい葬送の問題点ー」『変容する死の文化 現代東アジアの葬送と墓制』 東京大学出版会.

安田睦彦, 1992, 『お墓がないと死ねませんか (岩波ブックレット ; no. 262)』 岩波書店.

---

<sup>7</sup> 墓地、埋葬等に関する法律（昭和 23 年 5 月 31 日法律第 48 号）9 条において、「死体の埋葬又は火葬を行う者がいないとき又は判明しないときは、死亡地の市町村長が、これを行わなければならない。2 前項の規定により埋葬又は火葬を行つたときは、その費用に関しては、行旅病人及び行旅死亡人取扱法（明治 32 年法律第 93 号）の規定を準用する。」としている（厚生労働省 HP より）。